日本ホスピス緩和ケア協会
NEWSLETTER ニューズレター
Hospice Palliative Care Japan
No. 22
30.September.2011
日本ホスピス緩和ケア協会事務局
〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1 ピースハウス病院内
TEL 0465-80-1381　FAX 0465-80-1382
Website>>http://www.hpcj.org/　E-mail>>info@hpcj.org

ホスピス緩和ケア協会20年の歩み、そして新たなる挑戦

志真　泰夫（日本ホスピス緩和ケア協会　理事長／筑波メディカルセンター病院　副院長）

日本ホスピス緩和ケア協会（以下、当協会）の20周年記念大会は、2011年 8月27日、東京国際フォーラムに 500名を越える人々の参加を得て、無事終えることができた。記念大会の準備に当たった事務局、関東甲信越支部の幹事の方々に心から感謝する。また、運営に心を砕き、盛り上げて下さった柏木先生、山崎先生はじめ演者や司会の方々に御礼申し上げたい。

さて、20年を区切りとして新たな歴史への挑戦をテーマにした、わたしの講演概要をニューズレターに掲載し、今後の協会の進路について会員の皆様の理解を得たいと思う。

ホスピス緩和ケア協会：三つの挑戦

わたしは、わが国のホスピス緩和ケアの歴史を「揺籃期」（1973～1980）、「創成期」（1981～1989）、「成長期」（1990～2006）、「発展期」（2007～）と４つに分けて考えている。現在の発展期は、人間の成長にたとえれば「青年期」ともいうべき時期である。

１．地域との絆を強くしよう

最初の挑戦は、協会の会員が地域に根付き、広く根を張るための挑戦である。わが国は2010年から2035年にかけて、総人口は13％減少する反面、75歳以上の人口は現在の約１．５倍となるという高齢社会に突入している。しかし、この人口の高齢化は全国一律におきるわけではなく、また、医療資源も地域ごとに異なる。つまり、ホスピス緩和ケアに求められる役割やその仕組みは地域ごとに異なる可能性がある。したがって、協会の会員はまず地域の医療従事者と「顔の見える関係」を積極的に作る、そして、会員の施設に地域から仲間を受け入れ、地域に出かけて仲間作りをして地域の現状を実感する必要がある。その上で、今後地域の実情に合わせて「緩和ケアプログラムによる地域介入研究（OPTIM）」（2008年～2010年）の成果を活用できるようにしたいと思う。

２．ホスピス緩和ケアの専門性を高めよう

次の挑戦は、協会の会員が自らの存在と役割を見出すための挑戦である。私は、今後ホスピス緩和ケアの提供は「緩和ケア・アプローチ」を基本として「基本緩和ケアサービス」「専門緩和ケアサービス」という異なるレベルにわけられるようになると考える。そして、基本的なホスピス緩和ケアの提供は生死に関わる病気をもつ患者に接するすべての医師、看護師はじめ医療従事者と保健、福祉、介護等の専門職の役割であり、ホスピス緩和ケアの専門家だけに求められるものではないと考えている。その上で、ホスピス緩和ケアの専門家は、まず地域の対処が困難で苦痛の強い人たちに「直接ケアを提供する」、次に地域で困ったり戸惑ったりしている医療従事者等の「相談（コンサルテーション）にのる」、さらに地域の医療従事者や保健福祉介護等の専門職の人たちに「教育と支援を提供する」という主に３つの役割がある。その役割を担う上で、イギリスのGold Standars FrameworkやLiverpool Care Pathwayの取り組みが参考になるだろう。

３．将来への種をまき、輪を広げよう

３つ目の挑戦は、これからの10年を見据えて協会の各施設に若い力を迎え入れ、人材を育て、がん以外の疾患にも目を向けてホスピス緩和ケアの輪を広げるための挑戦である。緩和医療学会認定の緩和医療専門医は24名、暫定指導医619名と合わせても全国で643名しか医師の専門家はいない。看護師は、がん看護専門看護師 250名、緩和ケアとがん性疼痛看護認定看護師はあわせて1370名である。ホスピス緩和ケアの専門家の数としては未だ不十分といえる。協会の会員施設は、緩和医療学会の認定研修施設（全国で402施設）はもちろん認定施設でなくてもホスピス緩和ケアの専門家を育てるために力を貸していただきたいと思う。そして、

→次頁に続く

これまでの20年間はがん医療を主な領域としてホスピス緩和ケアを提供してきた。これからは、がん以外の疾患にも目を向けて広くホスピス緩和ケアを提供する準備を進めたいと思う。

人は困難を乗り越えて成長する

青年期とは、「自分とは何か」「これからどう生きていくのか」「社会の中で自分なりに生きるにはどうしたらよいのか」といった問いを通して、自分自身を形成していく時期である。そして、「これこそが本当の自分だ」といった実感が持てたとき、私たちは次のステップに進めるのであろう。今、私たちの協会は青年期の入り口立っている。

創立２０周年記念大会　報告

日　時：2011年 8月27日（土）　会　場：東京国際フォーラム

日本ホスピス緩和ケア協会　創立20周年記念大会を終えて

大会長　高宮有介
日本ホスピス緩和ケア協会理事、関東甲信越支部代表幹事
昭和大学医学部　講師

ホスピス・緩和ケアの関係者が集うと、共に癒されパワーを頂く。
８月２７日に開催された創立20周年記念大会も、まさにそんな一日だった。
大会長挨拶では、1990年生まれの息子の写真を紹介したが、赤ん坊が成人し、20年が経過したということを実感すると共に、その20年に見合った時間を過ごしてきたかも問われた気がした。

そして、今後の20年にも思いを馳せた。直後に20周年のビデオが上映された。長田理事、志真理事長の労作で、20年間の思い出が詰まった内容に、目頭を熱くした参加者も多かった。柏木先生の基調講演後、若手のパネルディスカッションで熱い議論がなされた。柏木先生には、要所で的を得たコメントを頂き、締めて頂いた。

午後のアカペラコンサートでは、五感を刺激され、音楽の持つ力に改めて驚かされた。更に落合恵子氏の流れるような話術と、Carole Kingの「You’ve got a friend」の語りには心が震えた。最後は、志真理事長講演の「ホスピス緩和ケア協会20年の歩み、そして、新たなる挑戦」であった。ユーモアを交えた川柳・俳句とともに、これからの道標を示して頂いた。

懇親会は、三枝先生と音楽療法士の新倉さんによるウェルカム・ミニ・コンサートでスタートし、途中、見苦しい山本リンダや重量挙げがあったものの、クイズ大会で大いに盛り上がった。
閉会は私のエールで締めとさせて頂いた。

最後に、準備の労を取ってくださった関東甲信越支部の幹事の皆様、そして、何よりも全体の詳細な準備をしてくださった松島様を始めとする事務局の皆様に感謝いたします。

【ウェルカム・ミニ・コンサート】

上【大会長のリンダ熱演】
下【同　重量挙げ】

【クイズ大会】

懇親会

来賓挨拶

日本緩和医療学会
理事長　恒藤　暁氏

日本緩和医療薬学会
代表理事　加賀谷 肇氏

記念大会プログラム

【午　前】
大会長挨拶
ビデオ上映「ホスピス緩和ケア協会20 年の歩み」
基調講演　「協会のこれまでの歩みと今後への期待」
パネルディスカッション
「専門緩和ケアが果たす役割」

【午　後】
アフタヌーンコンサート
特別講演 「母に歌う子守唄、そして」
理事長講演「ホスピス緩和ケア協会20 年の歩み、そして、新たなる挑戦」
懇 親 会

基調講演とパネルディスカッション

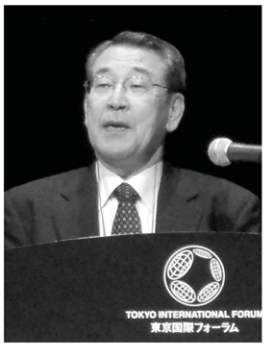
基調講演　：柏木　哲夫（金城学院学院長・大学長／淀川キリスト教病院 名誉ホスピス長）
パネリスト：新城　拓也（社会保険神戸中央病院）　**平山さおり**（ＫＫＲ 札幌医療センター）
福地　智巴（静岡県立静岡がんセンター）　**岡本　禎晃**（市立芦屋病院）
座　　長　：本家　好文（広島県緩和ケア支援センター センター長）
田村　恵子（淀川キリスト教病院 ホスピス主任看護課長）

創立20周年記念大会は、高宮有介大会長の開会の辞での、3.11大震災の犠牲者への黙祷から始まりました。
続いて日本ホスピス緩和ケア協会の設立の歴史が説明されるとともに、20周年記念ビデオが上映されました。全国各地で、患者家族とともに歩んだ協会の20年がまとめられ、心に響くものがありました。

「協会のこれまでの歩みと今後への期待」と題した基調講演では、初代会長の柏木哲夫先生により、末期患者に対する系統的ケアを淀川キリスト教病院ではじめ、ホスピスケアを始めた歴史を説明されました。ホスピスを立ち上げるにあたって、シシリー・ソンダースから贈られた言葉、「not doing, but being.何かをすることではなく、存在すること」「私がホスピスを創ったのではなく、ホスピスが私を見いだしてくれたのだ」「患者のケアの秘訣は患者を好きになることだ」を披露し後進への指針とされ、今後の進むべき課題として、緩和ケアの施設ケア、在宅ケア、地域ケアの統合を提言されました。

さらに「専門的緩和ケアが果たす役割」と題して、新城拓也氏、平山さおり氏、福地智巴氏、岡本禎晃氏によるパネルディスカッションが行われました。新城氏は専門医を取る動機を、「好きなことの分野に自分を捧げるつもりでいるという表明」と明言され、平山氏は、患者家族と目標を共有する重要性を示されました。福地氏は、ＭＳＷの緩和ケア領域の教育体制の重要性を、岡本氏は、薬剤師の緩和ケアへのチームとしての関わりの必要性を示されました。

最後に、柏木哲夫先生が、施設や人材などのハード面の充実だけでなく、人間関係のソフト面とのバランスが重要でしょうと締めくくられました。



【基調講演】柏木 哲夫氏

報告：宮森　正
（川崎市立井田病院・かわさき総合ケアセンター）

平山　さおり氏

新城　拓也氏

岡本　禎晃氏

福地　智巴氏

アフタヌーンコンサート

午後のプログラム前に行われたコンサートでは、ア・カペラグループ「トライトーン」が、「Ａ列車でいこう」「島唄」など馴染み深い曲を心に響くハーモニーで歌い、参加者を魅了しました。

特別講演「母に歌う子守唄、そして」

講演：落合　恵子（作家）
座長：山崎　章郎
（ケアタウン小平クリニック 院長）

長年にわたり人権や医療、介護と福祉等の問題に取り組んでこられた落合さんは、お母様を介護された経験と、東日本大震災、原発の問題等を通して、人と人との繋がりの大切さや命の尊さをお話くださいました。

落合さんは自宅で介護を続けた７年間を、ため息が出るような時も温かい波が押し寄せるような時もあったと話されました。回復が望めないなら今の瞬間を大切にしていこうと思ったそうです。総合病院の医師に「もうわからないよ」と言われたあとも、落合さんが声をかけるとお母様はゆっくりゆっくり見つめ返しました。在宅医療の医師には実にデリケートに付き合っていただいて、その医師から「あと一両日です」と、とても丁寧に説明していただいた翌朝も、いつも通りにしようとする意固地な自分がいた。清拭、リンパマッサージを行い、庭に咲いた朝顔の数をお母様に伝えます。お母様を抱きしめて「お母さんもしよかったら私をもう一度生むかい？」と聞いたら、お母様は瞼をパチパチと動かしました。「あなたの娘で本当によかったよ」と言ったあと呼吸が止まったそうです。お母様とのかけがえのない毎日を愛おしく丁寧に積み重ねていった様子が伝わってきました。そして、私は、愛する人を亡くすという家族の辛さにどこまで近づけているのだろうと胸が痛くなりました。

落合さんはお母様を見送った後の心の変化を「喪失の悲しみは消えない。悲しみから回復する必要はない。かけがえのない人を失ってどうにもこうにもならない。悲しみすら忘れたくない。悲しみはそのまま抱いていく。そう決めた時に背中が陽だまりのような温かいものに包まれた」と話されていました。日ごろホスピスケアの一環として遺族ケアを行っていますが、悲しみを乗り越えなくていいんだよと言ってあげられることは、お互いの気持ちが軽くなるのではと思いました。

落合さんは３．11以降、被災地の人たちに何ができるのか考え、原発の問題に向き合ってきました。自ら主宰する子どもの本の専門店『クレヨンハウス』で、東日本大震災、福島原発事故で被災された子どもたちに絵本を贈るプロジェクト“HUG&READ”や“原発とエネルギーを学ぶ朝の教室”を行っています。何をしなければいけないのか、どう生きるのか、私たち一人一人に問われていることだと思います。

【特別講演】落合 恵子氏

次に1970年代の歌『You’ve got a friend』を紹介してくださいました。Carole King の歌声に合わせ、「一人で支えきれずどうにもならないとき、大きな声で名前を呼んで、走っていくからね。だって友達だから。ここにあなたの友達がいる。ここにあなたの仲間がいる」と落合さんが曲の意味を伝えてくださいました。歌声と一体化した落合さんの優しくも力強い言葉に引き込まれ、深夜放送でディスクジョッキーをされていた頃の落合さんと重なっていた方も多かったのではと思いました。

最後に「今までの価値観と違う。どのように考えて生きていったらよいのか」という会場からの質問に、「つつましく豊かに生きること。経済効果と命とどちらが大切なのか自分に問いかけていく。怖いことは被災地のことを忘れること」とおっしゃっていました。落合さんのお話は、人の命に寄り添う私たちにホスピスケアの原点をもう一度見つめなおす機会を与えてくださったと思います。

報告：蛭田　みどり
（ケアタウン小平訪問看護ステーション）

2012年度の年次大会予定

次年度は、**2012年 7月14日（土）・15日（日）** の日程で、東京都内にて開催予定です。
プログラム内容など、詳細が決まり次第ご案内いたします。

【会場全体の様子】

第１回 ホスピス緩和ケア病棟看護管理者セミナー　報告

日　時：2011年8月28日（日）9:00～15:30　　場　所：東京フォーラムG409会議室
参加者：ホスピス緩和ケア病棟看護管理者83名

日本ホスピス緩和ケア協会20周年記念大会の開催された翌日、2011年8月28日（日）に、第1回ホスピス緩和ケア病棟看護管理者セミナーが開催された。

このセミナーは、“病棟運営・看護スタッフの育成に看護管理者のリーダーシップが及ぼす影響は大きいと考え、ケア提供システムや教育、スタッフケアの改善・向上の糸口となる知識・技術を学習したり、すでに各々の病棟で蓄積されたノウハウ・工夫を共有したりすることで、参加者の病棟運営改善の支援となる”ことを目的としている。

第一回は、テーマを「ホスピス緩和ケア病棟の専門性とそれを支える看護」とした。プログラムは、教育支援委員長の田村恵子さんの基調講演「ホスピス緩和ケア病棟の専門性とそれを支える看護」で始まり、次に、教育講演として太田加世先生（シーフェン代表）から「自己の看護管理実践を見直す―MaIN２を用いて―」というテーマでご講演いただいた。午後は、「ホスピス緩和ケア病棟における看護師教育」について、支部を中心としたグループに分かれてのグループワークを行った。

【セミナーの様子】

今回は、特に、専門的緩和ケアを担う緩和ケア病棟の役割を確認し、そこで働く看護師への教育の内容や方法について、病棟運営上のさまざまな困難がある中でどのように取り組んでいくかを、参加者個々の実践の共有をおこなうことで、自施設の病棟運営の参考となったことが、熱心な議論のようすから伺えた。また、自己の看護管理を点検するツールとして、MaIN２について学んだことで、臨床現場や組織内で起こるさまざまなことへの対処に追われがちななか、看護管理者として、改めて、今現在何が自分の役割なのかを見直す必要性を確認できたように思う。

セミナー終了後のアンケートからも、特に印象に残った事項として、管理者の役割（腹をくくる必要性・自分がどうすべきか・管理者のビジョン・ポリシー）やELNEC－Jの活用、専門的緩和ケアにおける看護師教育、そして、自らの実践を評価して看護管理を改善していく必要性について学んだとする回答が多かった。

この看護管理者セミナーは、協会の全国８支部が、教育研修委員会看護師部会と協働して、企画の担当を持ち回り、年１回開催する計画である。今回は、関東甲信越支部が担当した。次回は、九州支部、次々回は、北海道支部が担当予定である。この管理者セミナーが、企画また参加される全国のホスピス緩和ケア病棟の看護管理者によって、「面白く役に立ち、参加者が元気になるセミナー」となることを期待しています。

報告：二見　典子
看護師教育支援部会 部会長
ピースハウス病院 副院長・看護部長

ホスピス緩和ケア週間

当協会は、「世界ホスピス緩和ケアデー」を最終日とした一週間を「ホスピス緩和ケア週間」とし、ポスター掲示やセミナー・見学会などの企画開催を通して、緩和ケアの普及啓発活動に取り組んでいます。
今年度のホスピス緩和ケア週間は10月2日（日）～8日（土）の期間となり、同時期に施設見学会やセミナー・講演会、コンサートなどを企画している施設・団体を協会ホームページ（http://www.hpcj.org/）で公開しています。
9月20日現在、67企画の登録があります。

World hospice & palliative care day
Voices for hospices 2011

世界ホスピス緩和ケアデー
http://www.worldday.org/

厚生労働省へ提言を提出

山崎　章郎　健康保険・介護保険検討委員会委員長
ケアタウン小平クリニック　院長

左手前：厚生労働省大臣官房審議官　唐澤　剛氏
奥：　同　保険局医療課・医政局政策医療課
課長補佐　前田　彰久氏
右手前：当協会理事長　志真　泰夫
奥：　同　健康保険・介護保険検討委員会
委員長　山崎　章郎

2011年９月２日、協会は厚生労働大臣あてに「平成24年度医療保険および診療報酬改定に向けた提言」を提出してまいりました。６月14日、厚労省老健局長あてに提出しました同年の「介護保険改定に向けた提言」に引き続いての、当協会としての第２段の提言でした。７月に会員の皆さまにお願いしたアンケート調査の結果に基づき、健康保険・介護保険検討委員会が原案を作成し、その後、理事会、常任理事会での論議を経てまとめ上げた提言です。在宅ホスピス緩和ケア、緩和ケア病棟入院料、緩和ケア診療加算（緩和ケアチーム）について、患者・家族の皆さま、現場で真摯なケアに取り組む会員の皆さま双方にとって、より良いケアに繋がることを目的とした提言です。今回は短期間でまとめ上げざるを得なかった提言でもあり、論議の不十分な部分や、職種や立場によっての異論があるかとは思いますが、協会としての、初めての公式提言であることをご評価いただければ幸いです。提言の多くが施策に反映されることを願っています。
今後は、次回の改定年度に向けて、早い段階から準備し、また十分な論議を重ね、様々な職種・立場からなる会員の皆さまの納得を頂きながら、ホスピス緩和ケアの質を向上させることが出来るような提言を行っていきたいと考えています。最後に、提言にご協力いただきました全ての皆さまに感謝いたします。

※提出した提言は、協会ホームページに掲載しています

限りある「いのち」に寄りそって－ホスピス緩和ケア協会20年の歩み－ DVD販売のご案内

日本ホスピス緩和ケア協会の20年の軌跡をまとめたDVD
『限りある「いのち」に寄り添って－ホスピス緩和ケア協会20年の歩み－』
を制作いたしました。

日本のホスピス緩和ケアの黎明期から現在に至るまでの苦労や喜び、
全国の会員より寄せられた開設当初のエピソード、懐かしい写真、
関係者の証言などを織り交ぜながら、
日本ホスピス緩和ケア協会の20年の歩みを紹介いたします。

地域や市民へのホスピス緩和ケアの紹介、医療従事者への教育等、
様々な場でご活用いただければと考えております。
購入をご希望の方は、下記の要領でお申し込み下さい。

販売価格：**1,500円**（税・郵送料込）　時間：20分

１．①お名前　②ご所属　③送付先住所　④連絡先（電話・FAX番号・メールアドレス等）　⑤購入枚数
を明記の上、メールまたはFAXにてお申し込み下さい。

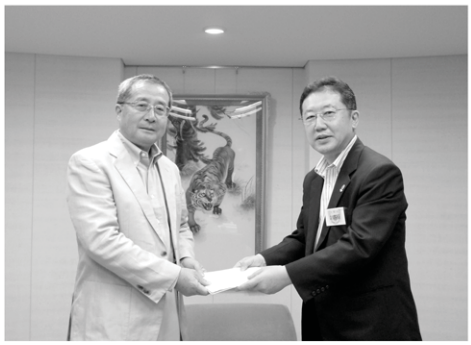
２．代金を下記の郵便振替口座にお振り込み下さい。
記号番号　00200-1-26966
加入者名　NPO法人 日本ホスピス緩和ケア協会
入金確認後に、発送いたします。

なお、協会ホームページからも申し込みできます。

東日本大震災への支援金について

当協会がメンバーとなっている、「Asia Pacific Hospice Palliative Care Network」(APHN) では、2011年７月14～17日にマレーシアにて開催された大会にて、各国からの参加者に東日本大震災への寄付を呼び掛けて下さり、日本円にして**236,770円**の寄付金が集まりました。
また、当協会でも、 8月27日（土）、創立20周年記念大会にて、参加者に東日本大震災への支援を呼び掛けました。その結果、**773,230 円**の寄付が集まりました。

この２つの寄付金について常任理事会で検討し、公益財団法人 日本財団が進めている「東日本大震災支援基金」に寄付することにいたしました。9月2日（金）、APHNと協会の寄付金、合計 **1,010,000 円**を支援金として日本財団へ届けました。
ご協力いただいた皆様に、厚くお礼申し上げます。



左：日本財団理事長　尾形　武寿氏
右：当協会理事長　　志真　泰夫

協会活動への寄付報告

当協会では、協会の事業に賛同し、応援して下さる個人や団体からのご寄付を受け付けております。2010年12月20日～2011年 9月 1日の期間に５件、総額 5,660,000円のご寄付をいただきましたので、ご報告いたします。

ご寄付いただいた方々

松島　弘伸様（大阪府）
鳥越　公彰様（滋賀県）
西田　　修様（大阪府）
秀永　米和様（神奈川県）
他匿名希望　1名

ご寄付いただいた方のお手紙より（抜粋）

母が前向きで母らしくいられたのは、ホスピスのおかげと感謝しています。ホスピスの方々に支えられ、私達家族も母に会うことを楽しみにできました。（中略）緩和ケアが、一日でも早く、がん末期患者さんなど特定の患者さんの為のものだけでなく、広く行き渡ればと願います。

【 ご寄付のお願い 】

私どもの活動は、協会の事業に賛同し、応援して下さる個人の方、団体からのご寄付によって支えられています。皆様の温かいご支援をお待ちしています。詳細については、

①氏名（法人の場合は法人名と連絡担当者名）
②住所
③電話番号
④メールアドレス（お持ちでしたら）

以上を明記の上、郵送またはＦＡＸで事務局迄お問い合わせ下さい。関係資料をお送りいたします。
また、メール、お電話でも受け付けております。

直接お振込みいただく場合、振込先は下記の通りです。

【振込先】　三菱東京ＵＦＪ銀行　新富町支店
口　座：普通預金　３６７７３９６
名　義：特定非営利活動法人
日本ホスピス緩和ケア協会
理事長　志真　泰夫

事務局通信

施設概要調査について

協会では、毎春、正会員を対象として施設の現状や利用状況を伺う調査を実施しておりますが、本年は東日本大震災の影響で延期しておりました。
現在、11月頃に調査を実施できるよう準備を進めておりますので、調査実施の際はご協力下さいますようお願い申し上げます。

協会ホームページに求人情報を掲載しています

協会では、ホームページへ正会員施設の求人情報を掲載しています。掲載を希望する正会員施設は、会員専用ページから登録票をダウンロードし、必要事項に記載の上事務局まで郵送して下さい。ダウンロードができない場合は、事務局へお問い合わせいただければ、登録票をお送りいたします。